

# 大学教員職におけるティーチングの意義と研究の価値

## ―パスコリドの大学教員の職務の分業化モデル―

流通科学大学 宇田川拓雄

### 1. はじめに

急速な社会変化と高等教育に対する社会の期待や批判に対応して大学教員の職務は多様化し研究に時間や労力を集中できない教員が増えている。この状況は米国では日本の一歩も二歩も先を行く形で進行しており、その考察も研究至上主義見直し、ティーチング教育強化の方向で深まっている。本報告では社会学教員の職務におけるティーチングの意義と研究の価値をパスコリドの提案するモデル (Pescosolido, 2008) にしたがって考察する。

### 2. パスコリドの社会学教員の職務分類

パスコリドはボイヤー(Boyer, E. L.)の大学教員の職務の優先順位の4分類モデル、ゴールド(Golde, C.)の博士号取得者を学問に仕えるスチュワード(執事、世話役)と見るモデル、ブラウウイ(Burawoy, M.)の社会学を学問への態度(道具的-反省的)と聴衆(学界内-学会外)

Attitude	Audience	
	Academia	Extra-Academia
Instrumental	Research	Application
Reflexive	Integration	Teaching

表1 社会学教員の職務(部分)

出典 Pescosolido, 2008

の二軸で4分類する公共社会学モデルを集約し、社会学教員の職務の多様化を社会的な分業ととらえている(表1)。道具的(instrumental)態度は学問の目的のために客観的価値中立的に学問を道具として利用する。反省的(reflexive)態度は社会学教員としての職業のあり方を自己反省的に振り返りその価値や意義を検討する。図の下段で聴衆(audience)が学界(academia)内部の

場合、学問の意味の批判的検討による学問の統合の維持が目的となる。聴衆がアカデミア外部(市民、学生)の場合、ティーチングの実施と後継者養成が目的となる。4つの職務は互いに対立したり明確に区画されるものではなく重複し相互に依存する関係にある。

### 3. ティーチングに努力を傾注する社会学教員

大学は研究環境に差がある。博士号を取得した院生がランキングのどの位置の大学に就職するかは研究能力と業績だけでなく時代の趨勢や偶然にも大きく左右される。新人のほとんどは研究大学ではなくティーチング負担が大きく研究の資源が乏しいリベラルアーツ系大学や単科大学、コミュニティカレッジに就職する。そこではティーチングが最も重要な仕事だが評価は研究業績で決まる。研究に不利な環境で研究業績を積み重ねアップグレードを目指すのは合理的であるが大の努力を要する。それができない教員は三流なのだろうか。ブラウンら(Sonia Brown et. al, 2016)は米国のコミュニティカレッジの教員のキャリア研究を行い、教員の多くは社会的経済的に恵まれず大学教育を受ける準備が不十分な学生のティーチングに傾注することは社会正義実現に寄与することと考え処遇が不利な現職に留まることを選んでいることを見いだした。職務の分業化が進むと、異なる職場で全ての教員が研究至上主義を維持することは不可能だである。これまでとは異なる職業的使命の確立と教員評価の仕組みが期待されている。

文献

- Pescosolido, Bernice A. 2008. "The Converging Landscape of Higher Education: Perspectives, Challenges, and A Call to the Discipline of Sociology", *Teaching Sociology*, Vol. 36, 95-107
- Sonia Brown, Stacye Blount, Charles A. Dickinson, Alison Better, Margaret Weigers Vitullo, Deidre Tyler, and Michael Kisielewski. 2016. "Teaching for Social Justice: Motivations of Community College Faculty in Sociology", *Teaching Sociology* 2016. Vol. 44, 244-255